

私の心は定まりました

まず本文を黙読あるいは朗読しよう。108 編の頭書に「歌。賛歌。ダビデの詩」とあるが、新しい創作賛美歌というより、1～6 節は 57 編 8 節～12 節、7 節～14 節は詩編 60 編 6～14 節とほぼ同じで、字句は多少変えられているが、2つの詩を繋ぎ合わせたものである。こうして讚美歌は代々語り継がれ、歌い継がれていくのである。捕囚から帰還したイスラエルの民が信仰の継承をし、喜び歌ったのであろうか。

それぞれの詩編 (57 編と 60 編) は既に釈義・解説済であるので、簡単に触れておく。イスラエル、そして、私たち信仰者は歴史世界の状況に翻弄され、右往左往しているようではあるが大局においては「神よ、わたしの心は確かです (定まりました)」と言えるのだろう。だから「わたしは賛美の歌をうたいます」と言えるのである。

1. 曙を呼び覚ます

2 節後半は「私の誉れよ」と翻訳されているが口語訳は「わが魂よ、さめよ」となっている。「目覚めよ、豎琴と琴よ」「私は (自分自身) 早くから目覚めるでしょう」。朝早く起きて、豎琴と琴の伴奏で賛美を歌うことが習慣となっていたのであろう。「曙を呼び覚まそう。」NRSV も Awake, my soul! Awake, O harp and lyre! I will awake the dawn. と翻訳している。朝起きてまず神を賛美する。賛美によって朝を来らせる。暗き夜が去り、希望の日が昇る。

2. 諸国の民の中で (4 節)

「主よ、諸国の民の中でわたしはあなたに感謝し/国々の中でほめ歌をうたいます。」と言う。4 節は自分の賛美(新共同訳では「感謝」)の場を「諸国の民の中で」と言う。密かな自己満足としての感謝や賛美ではなく、諸人民のただ中で、諸国のただ中で主を証する賛美である。

3. 主なる神の慈しみとまことは大きい! (5 節)

なぜなら、あなた (Yahweh) の契約への忠誠は諸々の天よりも偉大であり、あなたの信実は何雲まで届くから。天と雲は神の臨在の象徴であり、「ヘセド」と「アーマン」が対句として登場している。

4. 願い (6 節)

信仰告白的賛美から願いへと移る。神の事実がなるようにと願う。「神よ、天の上に高くいまし/栄光を全地に輝かせてください。」原語はあなたの栄光が全地に」とあるだけ。

5. 右の御手でお救いください (7 節)

先に述べたように、7 節から詩は後半に入り、詩編 60 編 6～14 節が接木される。「あなたの愛する人々が助け出されるように/右の御手でお救いください。それを我らへの答えとしてください。」イス

ラエルと神との関係を「わたしとあなた」の関係で考え、経験し、自らを含め「あなたの愛する人々が」終わりには救われるように、あなたの右の手で救って下さい。そして答えて下さい。」右の手は力の象徴である。

6. 神の土地分配の宣言・託宣 (8-10 節)

現在パレスティナの土地分配についてはガザのハマスとイスラエル軍との戦闘行為で言及するのが難しいが、農民にとっては土地の所有は死活問題であったことは日本社会でも同じであり、想像することは容易いことである。神の祝福は具体的形を取り、8 節以下では神が聖所エルサレム（あるいは原語はただ「神の聖において」とも理解可能である）から土地割譲の託宣をされる。10 節までがカッコに入れられ神の宣言内容となっている。周辺諸民族も含めてそれぞれの街の形容も異なっている。「わたしは喜び勇んでシケムを分配しよう。」「宣言した」はただ「語った」である。「私はシケムを喜び、分割するであろう。そしてスコテの谷を計るであろう。」「シケム」はゲリジム山とエバル山の谷間にある中央パレスティナの要衝にあり、族長たちに関する聖所があった。ヨセフの骨はここに葬られ、12 部族がここで契約を締結した。「スコテ」はヨルダン川の東平原にあり、ヤボク川ヨルダン平原で南下する付近にあった。ヘシボンの王シホンの領地であったがイスラエルの侵入後ガドの領地となった。ヤコブが家畜小屋（スコテ）を建てた。ギデオンは敵を追ってこの地まで来た。この付近にソロモンの鑄造所があった。ギレアデはヨルダン川の東で南はアルノン川、北はヤルムク川に至る土地でヤボク川の南はガド族、北はマナセの半部族の所領であった。牧畜が盛んで、乳香の産地でもある。スコテと並んで、マハナウムやミズバが主要な街である。マナセと並び「わたしのもの」とはどのような意味であろうか？主要部族のエフライムはわたしの兜（ヘルメット）、ユダはわたしの采配（軍配？ 笏）は理解しやすい形容である。

以下、「モアブ」、「エドム」は近親異民族であり、神の「たらい」「履物」と価値的には低い表現で言い表されている。「ペリシテ」（ヒッタイト）は鉄器文化の担い手でありかなり敵対的であったので「わたしの叫びを響かせようとなっている。」「モアブ」はルツの出身地で死海の東岸の地域に住み、「エドム」はヤコブの双生児の兄エサウの子孫であり、モアブの南の地域に住んでいた。

7. 主は「万軍」の主と言われ、イスラエルと共に闘う神であった (11-12 節)

土地割譲の宣言の後、現実にはイスラエルがその地に安穏として生活できたのではなく、葛藤があったことが歌われる。敵に「包囲された町に/だれがわたしを導いてくれるのか。」「エドムに、だれがわたしを先導してくれるのか」と問い（エドムはエルサレム陥落時イスラエルを裏切った）、「万軍の主」である神は、イスラエルを守る神ではなかったかと懇願し、「神よ、あなたは我らを突き放されたのか。神よ、我らと共に出陣してくだらないのか。」と嘆いている。

8. 最後の祈願と安心 (13-14 節)

108 編は「助け、救い出して下さい」という切なる祈願と神が共に闘って下されば安心であることを告白して終わる。「どうか我らを助け、敵からお救いください。人間の与える救いはむなしなものです。神と共に我らは力を振るいます。神が敵を踏みにじってくださいます。」「アダムの助けは空しい」。土から造られたアダムは決して神ではなく、その助けなどは空しく、おぼつかない。しかし、万軍の主が共に出陣して下されば、神と共に力を出し切ることができる。むろん、自分たちではなく、

「神ご自身が敵を踏みにじってくださいます」という安心に至る。12節以下は「われわれ」が主体となり、「神とわたしの」の人格的關係にある「私」から「われられ」に移行することで、信仰共同体の祈願と信賴で終わっている。